

令和4年度 家族並びに施設職員研修会の開催

令和5年2月4日(土),鹿児島市与次郎のサンロイヤルホテルにおいて,鹿児島県知的障害者福祉協会に鹿児島県知的障害者施設家族会連合会が共催し,「家族並びに施設職員研修会」が今年もコロナ感染防止策として,検温や手指の消毒,マスクの着用などをとりながら,会場と各施設等をオンラインで結び開催されました。参加者は,会場,オンラインなど約150名でした。

オンライン講演

作家で会話のできない重度の自閉症,パソコン及び文字盤ポインティングにより,コミュニケーションが可能な東田直樹さんと母親の東田美紀さんのオンラインによる講演がありました。

東田直樹さんは「自閉症の僕が跳ねる理由」,母親の美紀さんは「ひとりの親としての想い」のテーマにより対話形式等での講演でした。

直樹さんは,「幸せは,自分が持つ感覚。一緒にいる人が自然体で一緒に楽しんでくれたら自分も楽しい。誰にでも悩みはあります。悩みの解消には話し合うことが大事です。また,自分のことは『誰も分かってくれない。何も出来ることはない』と思わずに,僕の言葉に耳を傾けてくれたことに感謝しています。」と話されました。

また,美紀さんは,「直樹さんは,絵描き歌から始めたら絵が描けるようになりました。きっかけさえあれば工夫次第では出来ることがあります。自閉症なのだから支援の方法もいろいろとあります。自閉症の特徴を見据えた支援もありますが,支援の仕方は一概に言えません。直樹さんがどうしたいか,直樹さんが決められるようにいろいろな支援員さんがいても良い。一緒にいて,顔を見るだけで癒やされる。利用者を心待ちにしている支援員さんもいます。気持ち良く寄り添ってくださる支援員さんの皆様に感謝しています。」などと話されました。

研修I

『家族として思うこと』

家族会からは,種子島地区支部の「たちばな園保護者会の上妻正博さん」と鹿児島市地区支部の「あさひが丘学園保護者会の川畑岩夫さん」が発表されました。

上妻さんは,弟さんがたちばな園にお世話になっていらっしゃる。

兄として「弟とたちばな園」ということで

- ① 誕生から小学校時代
- ② 吉野学園・あかつき学園・たちばな園時代
- ③ 弟からの手紙
- ④ 今思うこと

などについて発表されました。



弟さんの幼少のころの病院通い、母親が弟を同伴しての通学(母曰く「弟と机を並べて勉強した」と話してくれたこと)、あかつき学園での就労、たちばな園の運動会での剣舞(弟の剣舞に対する思いや晴れ舞台の姿を見て成長したことに涙したこと)。特に、弟さんが50歳の誕生日を迎えたとき、「私と妻宛てに手紙が届き『あんちゃんと孝子ねえちゃんお元気ですか。50になりとてもうれしいです。…おとうさんとおかあさんをよろしくおねがいします。…孝子ねえちゃんからだにきをつけてください』など」と書いてありました。弟は、どんな気持ちで書いたのだろうかと思うのです。いつも『あんちゃんは、孝子ねえちゃんを大事にせんばーじゃろ』と言っていました。今思いますと障がい者にもいろいろな個性と個人差があります。弟は、幸せなことに各施設や支援員に大事にされ、個性を引き出してもらえました。私は世間の目を気にしていましたが、両親は弟をどこにでも連れて行きました。近所の人も妹の友人も一緒に遊び優しく接してくれ、弟の存在は、私たち家族や兄弟・姉妹の生き方に大きな影響を与え、妹の2人は看護師と保母となり障がい者施設で働きました。弟がいたから『今の私がある』と思い、高齢の両親の面倒を妻と見ながら、一番大事な弟を妹たちやたちばな園の支援員さんと話し合いながら弟の望むように面倒を見て行きたいと思っています。」と話され、上妻さんの弟さんにご両親、妹さん達への思いが伝わってきました。また、弟さんが上妻さんの奥様の孝子様に「からだにきをつけてね」とねぎらいの言葉をかけていらっしゃることなどに涙腺が緩み、目頭を熱くした方が会場には数多くいらっしやいました。

次に、川畑さんは、自閉症のある子どもさんのことについて

① 幼少、あさひが丘学園・グループホーム「夕日丸」入所等 ② あさひが丘きょうだい会などについて発表されました。

冒頭、「施設の職員の皆様方にたいへんお世話になっています。心から感謝申し上げます。ありがとうございます。」から始まりました。

子どもさんの幼少時は、発語が遅い、運動は活発で一輪車に乗って唯一の相棒。あさひが丘学園への母子通園、3歳から幼稚園に入園。田上小学校と中洲小学校の「竹の子学級」への通学、クラブ活動に悩むとともに妻の体調不良と重なり、「あさひが丘学園」へお世話になり、武岡台養護学校への転校・卒業。あさひが丘学園成人部、GH「夕日丸」への入所に至る経緯などを話されました。

特に、7歳年上の兄を伴ってGH「夕日丸」の見学で弟の生活実態を見聞した結果、兄は、仕事の都合で休日に休みがない職場であり、「弟のために月に1回、日曜日に休みを入れたから」と兄なりに難儀・苦労もあったのに愚痴のひとつも言わず話してくれ安心した。

更に、あさひが丘学園において「あさひが丘きょうだいの会」の設立の話があり、兄が「あさひが丘きょうだい会」の会員となり、「秋祭り」の会場設営等に頑張っている。

どこの家庭でも、親亡き後は、障がい者の行く末が一番の心配事です。ひとりっ子の利用者の皆様方も気軽にきょうだい会の仲間として支援ができれば良いと思われれます。各家族会において「きょうだいの会」設立の検討をお願いします。

研修Ⅱ

『利用者本人と職員からのメッセージ』

鹿児島市鴨池新町に所在するレストランの「ピースフルガーデン」に勤務されている桑原琳さんと管理者の有村達郎さんが発表されました。

桑原さんは、「明るく、人と接すること大好き」ということでレストランにて働いています。レジ打ちではミスを出さないように計算ドリルを毎日している。接客では、アビリンピック(障がい者技能競技大会)に出場し、支配人から「いつものとおり、笑顔で落ち着いてすれば大丈夫」と教えてもらい、2年連続して銀賞を獲得して嬉しいでした。将来の夢は、介護士やヘルパー2級の資格を取りたい。また、お年寄りと話をするのも大好きですが、レストランで働くことも大好きです。

管理者の有村さんは、従業員さんには「お・ひ・た・し」を心がけてと話しています。「お…おこらない」「ひ…否定しない」「た…助ける」「し…指示する」ということです。働くとは、仕事を通じて成功体験を積み重ね、自分が『認められた』ということを感じることであり、「出来ることがある幸せ。働く場所がある」などです。良いこともたいへんなこともある。また、従業員さんにもいろいろあるけれど「楽しい職場だった」と言われる様に指導したいと話されました。支援員さんの心遣いに心から利用者や家族も感謝しています。よろしくお願ひいたします。

令和4年度 鹿施連研修会の開催

～「鹿児島きょうだいの会」代表・西野将太氏により

「これから誰に託すか、どこに託すか」

のテーマにて講演 約100名が参加～

令和5年3月9日(木)、ハートピアかごしま多目的ホールにおいて、家族や利用者の高齢化に伴い、家族として利用者の行く末に心を痛めており、また、利用者の兄弟・姉妹として、今後どのように対応することが大事なのかなど、家族としての利用者の幸せを求めするためにはどうあるべきかなど、今後、家族会員としての考え方や活動の指針を模索するため研修会を開催しました。なお、昨今の新型コロナウイルス感染症拡大防止の諸対策を講じて開催しました。来賓、家族会員及び利用者の兄弟・姉妹さんなど約100名の参加者がありました。



鹿児島きょうだいの会代表の西野将太氏の講演

西野さんには、重度知的障がい者・自閉症である11歳年下の弟さんがいらっしゃいます。

兄弟として体験談をもとに「きょうだいとしての人生を振り返って」として講演されました。

弟さんは発語も遅く、水とハンガーへのこだわりが強く、自宅から遠い保育所・幼稚園へ入園した。友達には、男の子だから言葉が遅いと話し、母が弟を送迎するときに同乗して幼稚園に行ったとき、先生から「園内でこんなこと、あんなことも出来ましたよ。褒めてください」と言われたときは、とても嬉しかった。母も喜んでくれた。また、弟の悪いところばかりに気がついていたことを反省し、家庭に灯りがつきました。

家族の役割として、子どもの障害によって「親」という特定の役割に徹してしまう懸念。「親」であることが自己実現であると子どもの自立を無意識に妨げてしまう恐れがあります。誰もが社会の一員であること。障がい者の自立と社会参加の促進が望まれています。『自立とは依存先を増やすこと』であります。東日本大震災で感じたことは、保護者以外に依存できる相手(人、場)を開拓したときに、子育ての成功と言えたのではないのでしょうか。

きょうだい・ヤングケアラーについて、4月10日は、きょうだいの日(シブリングデー)です。病気や障害の有無にかかわらず、すべてのきょうだいのための記念日です。男女や上下の区別なく兄・弟・姉・妹を現すため「きょうだい」とひらがな表記されています。家族にきょうだいは含まれるのか？親だけが家族ではない。きょうだいも含まれます。

きょうだいの悩みとし、①親が自分にかまってくれない不満 ②「偉いね。たいへんだね。」などと励ましの言葉にプレッシャーを感じる ③進学や就職進路選択 ④友達や恋人に障害のあるきょうだいの話をするべきか？ ⑤結婚するとき不利になるのか？ ⑥親がいなくなれば、面倒を見ないといけなのか。「カミングアウト・進路・結婚・親亡き後」などを周りの人に話をして聞いてもらうことが大切です。公的な所に相談し、的確なアドバイスをもらいましょう。

「鹿児島きょうだいの会」の思いは、きょうだい自分の人生を考えるきっかけを作り、「きょうだい」「ヤングケアラー」という言葉の普及のために設立しました。障がい者がいるという環境のきょうだいや家族が「悪い」「かわいそう」ということでなく、周囲に助けを求められる環境や配慮を必要とするきょうだい・家族がいることを周知するためです。障がいのある子どもがずっと幸せで過ごせますように願っています。

弟は、現在、福祉施設に入所していますが、面会しますと『お兄ちゃん、よく来てくれたね。ありがとう』と言われて嬉しくなりました。母もとても喜んでくれていますなどと話されました。

親として子どものことを、きょうだいとして利用者のことを周りの人に話をして聞いてもらいましょう。きっと道は開けてきます。と話され、講演を終えていただきました。

今回の研修会において、これからの家族会活動を更に充実しなければと勇気付けられました。

1

『私の人生の師になった兄を思う』

元、北薩摩地区支部・支部長(鹿児島市 久保正和さん)

障がいを抱えながら、頑張って生き抜いた兄が満80歳で亡くなったのは、4年前の春でした。それまで22年という長い間、さつま町の福祉施設に入所して、家庭のような温かい環境の中、我が身内のように育ててくださった理事長さんをはじめ、職員の皆さんへの感謝の気持ちを片時も忘れたことはありません。お陰様で告別式も理事長さんの計らいで、慣れ親しんだ施設の近くで行うことが出来ました。当日は、施設の友人の皆さんもたくさん参列してもらい、真心一杯の和やかなお別れが出来ました。思わず家内と「兄は最後まで幸せだったね」と涙で合掌することでした。兄は、戦争直前、難産の末に脳性マヒやてんかんという障がいを伴ってこの世に生を受けました。以来、その生い立ちには苦労が多いでした。親の苦労。特に、就寝中の母の難儀は推して知るべしでした。また、兄は、幼少のころ囲炉裏において、利き腕に大やけどをしてしまいました。

兄の所に面会に行きますと笑顔で迎えてくれました。たわいのない話をした後、私が兄に「大丈夫。俺がついているから」と伝えますと安堵した顔を見せてくれていました。

一方、私が、教員採用試験に合格したとき、兄はとても喜んでくれました。私に『優しい先生になれよ』と励ましの言葉も贈ってくれました。この言葉が、教員生活の「人生訓」となり、無事に定年退職を迎えることが出来ました。結びにさつま町の福祉施設に入所できたことが無情の幸いでした。「お兄さん、ありがとう」安らかにお眠りください。合掌(弟より)

2

『弟との関わり』

元、鹿児島市地区支部・理事(南九州市 川口正一さん)

弟が亡くなってから6年が経ち、今年は7回忌を迎えます。この度、鹿施連事務局から「きょうだいとしての思いや関わりなど」の投稿依頼を受けました。年月の流れの早さとメモリアルなこの年に不思議なご縁を抱くことでした。

私が『家族会及び鹿施連』の活動に直接関わるようになったのは、退職後からでした。父母ともに早逝でしたので、弟とは亡くなるまでの37年間、深く関わったこととなります。

5人のきょうだいのうち、私とすぐ上の姉が密接に関わりましたが必然的に、小さい頃から『あんやん』と呼ばれて遊び相手をしていました。また、私の仕事柄、割りときれいな都合がつけられ、私が中心となって様々なことに対応するのはある意味必然的なことでした。だから家族会の活動には、私自身なんの差し障りもなく皆さんと同じ目線で活動できたと思っています。

家族会の目標は、障がいを持った子どもやきょうだいの人権が保障され、この世の中で自己実現し、のびのびと生きる居場所を得ることだと思います。そのためには家族会が連携し、国や自治体に制度改革を働きかけ、全ての方々の理解・共感を得なければならない。言い換えれば、これらのことを実現するためには、保護者、施設経営者、職員の方々が当事者意識を持つだけでなく、国や自治体、社会そのものが当事者意識を共有できるように活動を深める必要があるということだと思います。家族会の活動が社会の多様化の動きと軌を一にして価値観を共有しながら更に発展することを願っております。

編集後記

今回は、2回の研修会を特集しました。特に、西野将太氏の講演で利用者の「きょうだい」としての思い、悩み、親亡き後の対応等を「これから誰に託すか。どこに託すか」として学びました。また、「きょうだいとしての思い」として2人の方に投稿していただきました。利用者や親・きょうだいが「生まれてきてよかった」と思わせる共生社会が実現できることを望みます。